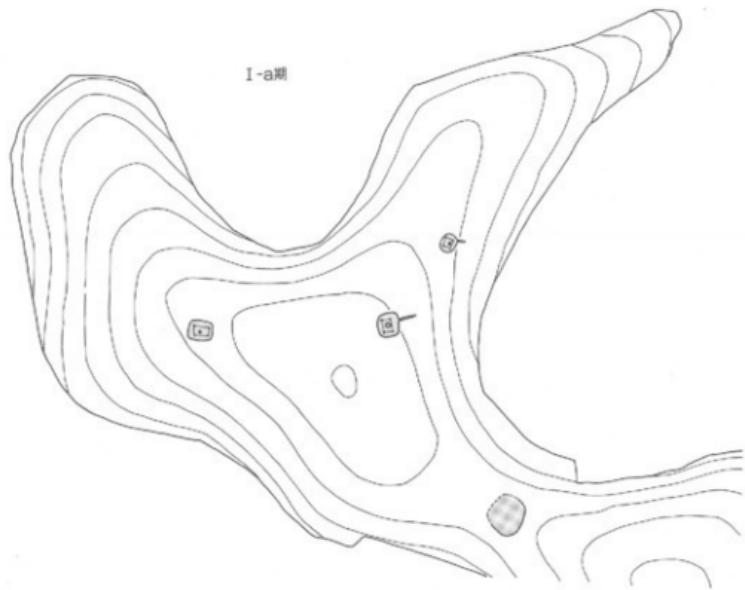
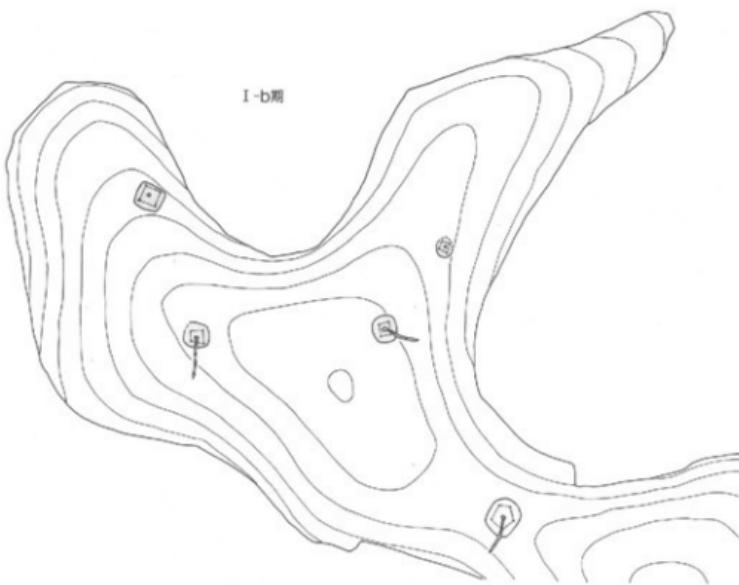


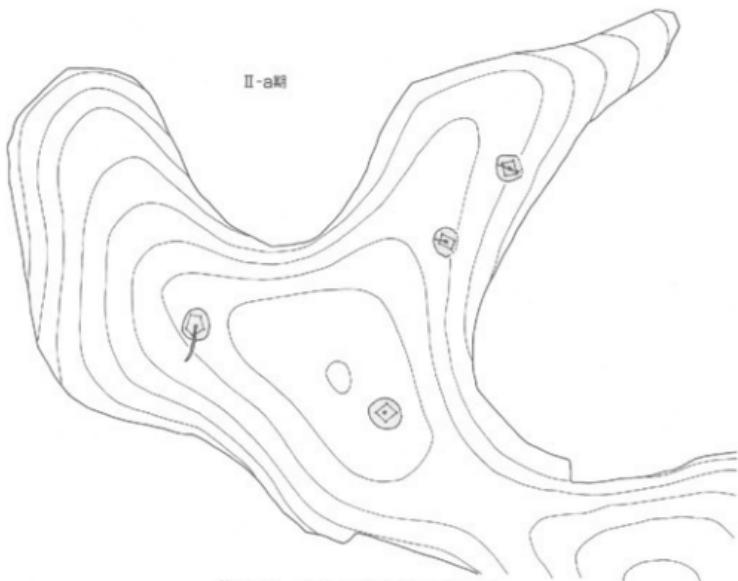
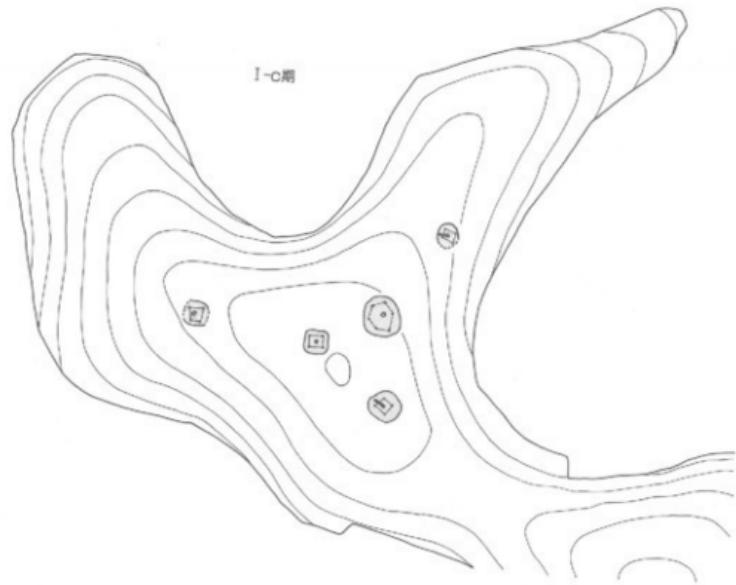
I-a期



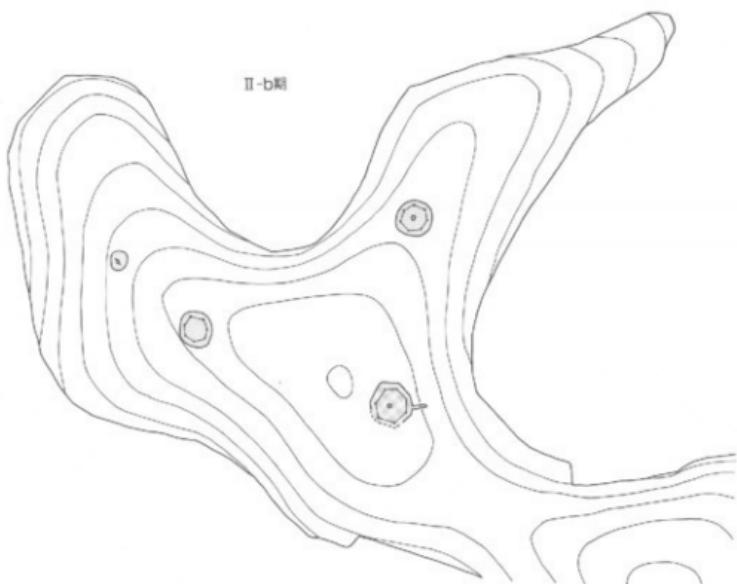
I-b期



第190図 B地区集落時期別配置図(1)



第191図 B地区集落時期別配置図(2)



第192図 B地区集落時期別配図(3)

記の5期区分をさらに裏付けるものとして有効であろう。I期・II期の建て替え・拡張の具体的な検証から想起した細分は、土器の同一型式存続期間中になされたものであると理解され、以上のことからI-a期、I-b期、I-c期、II-a期、II-b期の5期区分を設定した。一方、ここで問題となるのは拡張を伴わない住居の扱いである。これらに関しては、出土土器により大まかなI期・II期の所属をまず決定し、その内で新・旧の様相を見出し各時期に振り分けた。そしてこれまでの検証に基づき作成したのが第189図である。なお住居址10に関しては、本文中では一応住居址として取り扱ったが、中央穴の欠如からここでは住居址から除外した。

以上の前提条件の下でB地区の住居址を細かく分析していくと、合計22軒の住居が時期ごとにまとまりをもって営まれていたことが判る。第190・191・192図には時期別の住居配置図を示した。以下、この図に従ってB地区における構成住居の変遷を述べることにする。

I-a期（第190図）

住居址1-1、住居址4-1、住居址6-1、住居址9-1の4軒で構成される。そのうちわけは、隅丸方形の4本柱住居が1軒、円形の4本柱住居が2軒となっている。ただ住居址1-1に関しては、西半を住居址1-2によって切られているため詳細は不明であるが、残存部で径が7.5mを測る大形の住居であるため、柱穴も5本以上有すると希望的に解釈したい。し

たがって、集落は大形住居1軒と小形住居3軒で構成され、丘陵上のほぼ全域に分布する。

I-b期（第190図）

住居址1-2、住居址4-2、住居址6-2、住居址9-2、住居址12の5軒で構成される集落である。円形の5本柱の大形住居が1軒、円形の4本柱の住居が2軒、隅丸方形の4本柱の住居が2軒の構成となる。丘陵上の立地はI-a期と基本的には変わらないが、方形の 小形住居が1軒増加することになり、大形住居1軒と小形住居4軒で營まれた集落となる。ここでもやはり大形住居（住居1-2）は、丘陵のつけ根部分に独立して構築される。

I-C期（第191図）

住居址2-1、住居址4-3、住居址6-3、住居址8、住居址9-3の5軒で構成される。円形の6本柱大形住居が1軒、円形の4本柱住居3軒、方形の4本柱住居が1軒のうちわけとなる。I-a、b期に比べ5軒の住居が互いに近接して營まれた印象をうけるが、ここでも大形住居1軒、小形住居4軒による基本的な構成は変わらない。

II-a期（第191図）

住居址2-2、住居址6-4、住居址7、住居址9-4の合計4軒で構成される。うちわけは、円形の5本柱の大形住居が1軒、小形住居が3軒となる。

丘陵上の立地でみると、3軒の 小形住居が丘陵の東斜面寄りに並んで構築され、大形住居は独立している。

II-b期（第192図）

住居址3、住居址5、住居址9-5、住居址10の4軒で集落が構成される。そのうちわけは円形の4本柱の住居1軒、円形の7本柱大形住居が2軒、多角形の7本柱大形住居が1軒となっている。小形住居1軒に対して大形住居が3軒という構成は、II-a期までにみられた集落構成に明らかな変化をもたらすものである。丘陵上の立地でみると、4軒の住居が平坦部をはさんで対称に構築されている印象をうける。

I期・II期を通じて概観できる小原遺跡B地区の集落構成の特徴は、拡張により何時期かに重複する住居を軸として集落が変化していくということである。また、拡張を伴わない方形ないしは円形の 小形住居がI-b期より各時期に1軒ずつ新設される事実も判明した（註11）。現在のところ住居の耐用年数は、屋根に葺く茅の耐久性や木材の老朽化の観点から20~30年との見方が主流となっているが（註12）、住居址4・6・9のように幾度かの拡張を経験する住居では、ほぼ途断えることなく次代へひきつきがなされていたと考えられる。さらに創造をたくましくするならば、以上のような拡張を経た住居の成員こそが、集團における伝統の継承と、統率力を兼ね備えたムラの長へと成長を成し遂げることが可能であったといえるのではなかろうか。

I期においては、5~6本柱を有する大形住居1軒と小形の住居3~4軒で構成される集落

の様子が明示された。この傾向は、西吉田遺跡（註13）、一貫西遺跡（註14）からも同様の実態が報告されていているように、極めて中期的な流れの中で理解されよう、これに対してⅡ期の様相は、集落を構成する住居に大形化の波が訪れることに大きな画期が認められる。一般に、弥生時代後期の住居は、大形である点に特徴づけられてきた。大田十二社遺跡、一貫東遺跡（註15）、天神原遺跡（註16）、上部遺跡（註17）からは、いずれも直径10m前後の住居が報告されている。B地区においても住居址9-4が6.5m、住居址3が7.5m、住居址5が6.5mと例外でない。しかもこの場合、単に集落内の大型住居の突出した巨大さを指すのではなく、集落を構成する住居がおしなべて大形化する点が注目に値するといえよう。住居の構成変化は、それを総括する集団構成の変化に通ずる現象と当然理解される。以上の結果を最大限に評価するなら、中期以来受けつぎ発展させてきた集落形態の新たな画期をこの時期に見出すことが可能であろう。現在整理中の大畠遺跡は、この時期に続く集落構成を考える上で良好な資料を呈示している。今後これらの検討によって、後期の弥生社会が内包していた集落変遷の流れが明確に位置づけられていいくだろう。その際、住居址だけではなく1つの集落を規定する建物址、土壤等も含めた要素の1つ1つを検証し、相互に結びつけていくことが重要な課題であると思われる。

以上、拙稿ではあるがまとめとする。先学諸氏の御叱止をお願いする次第である。

2 古墳地代

(1) 古墳の築造時期と若干の考察

築造時期と順序

1～4号の4基の古墳を調査したが、4号墳だけが新しく時期を異にしている。すなわち、1～3号墳がほぼ同時期の築造であるのに対し、4号墳だけが後出のもので前3基とは群を構成しないということである。まず、4号墳の築造時期から検討してみよう。遺物が少なく、時期を決定するのには乏しい資料であるが、第38図の1の須恵器杯蓋がある。この須恵器は周溝に囲まれた円形区画の中心部より出土したものである。口径12cm、器高3.4cmを測る小型のものである。この特徴は田辺編年のTK209（註18）、中村編年のⅡ型式6段階（註19）に相当するものと考えられ、7世紀初頭～7世紀前半頃の年代観が得られよう。

次に、1～3号墳の築造時期について考えてみよう。まず、1号墳であるが、第1主体部と第2主体部は前述したように須恵器杯身と蓋のセット関係から、非常に近接した時期を共有するものである。と言ふよりむしろ同一時期と考えて問題はない。第27図4・5の杯蓋は口径約12cmと小さいこと、天井部と口縁部との境界に稜線をもつこと、口縁部端面の内面側に明瞭な稜をもつことなどの特徴があげられる。これらの特徴は田辺編年のTK47、中村編年のⅠ型式5段階に対比されよう。そして、年代的には6世紀初頭頃が考えられよう。2号墳からは第1



第193図 小原1~3号墳と周辺古墳分布図 (S = 1 : 12,500)

番号	古墳名	埋葬方法	備考・文献
1	長崎山1号墳	竪穴式石室	津市教育委員会発掘調査中
2	〃 2号墳	木棺直葬	〃
3	〃 3号墳	〃	〃
4	〃 4号墳	〃	〃
5	〃 5号墳	竪穴式石室、木棺直葬	〃
6	〃 6号墳	木棺直葬	〃
7	〃 7号墳	〃	〃
8	〃 8号墳	竪穴式石室、木棺直葬	〃
9	〃 9号墳	木棺直葬	〃
10	長崎山1号墳	木棺直葬3、組合せ石棺	今井啓「原始社会から古代国家の成立へ」『津市史』第1巻 1972年
11	〃 2号墳	木棺直葬2	〃
12	茶山1号墳	竪穴式石室、木棺直葬5	保田義治「茶山古墳群」津市教育委員会 1989年
13	〃 2号墳	箱式石棺	〃
14	一貫西2号墳	不明	行田裕美「一貫西遺跡」津市教育委員会 1990年
15	〃 3号墳	木棺直葬	〃
16	大塚1号墳	木棺直葬5	津市教育委員会が発掘調査を実施、報告書未刊
17	〃 2号墳	〃 1	〃
18	小原1号墳	組合せ石棺	本書
19	〃 2号墳	木棺直葬	〃
20	〃 3号墳	石蓋土壙墓	〃
21	鷹星古墳	箱式石棺	波辺健治「美作鷹星箱式石棺調査報告」「古代吉備」第2集 1958年
22	鷹塚古墳	箱式石棺	小畠利幸他「鷹塚古墳群・クズレ塚古墳」津市教育委員会 1990年
23	〃 2号墳	〃	〃
24	〃 3号墳	〃	〃
25	〃 4号墳	石蓋土壙墓	〃

第3表 小原1~3号墳と周辺古墳比較対照表

主体部と第3主体部から須恵器杯が出土している。第31図の1～3がそれであるが、1号墳出土のものと比べると個体差と考えられるような細かな相違は指摘できるが、よく似ている。3号墳は周溝から杯身と蓋が出土している。第35図に図示したものがそれであるが、1・2号墳のものと比べてやや口径が大きいこと、杯蓋の大井部と口縁部との境界がやや鈍くなることなどが指摘できるが、1号墳と2号墳の差と同様1型式を画すような変化ではない。

以上のことから、1～3号の3基の古墳はほぼ同一時期、すなわち6世紀初頭頃に相前後して築造されたことがうかがえる。そして、あえて築造順序に触れるならば、規模、立地の優位性から考えて、1号墳→2号墳→3号墳という順序が想定されよう。

若干の考察

次に、小原1～3号墳の築造された時期、すなわち6世紀初頭頃を相前後する時期の周辺の古墳との関連の中で若干の問題点を提起しまとめとしたい。

この地域、旧勝田郡河辺郷、現在の津市山日上、国分寺、瓜生原地区には美作地方で最も古いと考えられている日上天王山古墳を始め、日上歟山古墳群、国分寺飯塚古墳など横穴式石室導入に先立つ比較的古い古墳が築造されている。横穴式石室は一貫西1号墳（註14）、クズレ塚古墳（註20）、御谷古墳（註21）などのように皆無ではないが、点在するだけで群を構成するような在り方はみられない。この地域に最古の古墳が築造された理由はあくまでも推測の域を出ないのであるが、吉井川を南から北上した際の津山盆地の玄関口にあたるという地理的立地条件が作用したものと考えられる。ここではこれらの地域の中で小原1～3号墳が位置する吉井川の支流広戸川流域の古墳を取り上げ検討する。

第192図には現在までに調査されて概要の判明しているものをあげた。21の隠里古墳、22～25の崩レ塚古墳群は伴出遺物がなく確実なことはいえないが（註22）、いずれも5世紀後半～6世紀前半の時期に属するものである。まず、埋葬方法からみてみよう。1～9の長歟山北古墳群は現在調査中であるが、本棺直葬と竪穴式石室が共存している。10・11の長歟山古墳群も組合せ石棺と木棺直葬が共存している。12・13の茶山古墳群は竪穴式石室と木棺直葬、それに箱式石棺という組み合せである。15の一貫西3号墳は木棺直葬である。14の2号墳は主体部は遺存せず不明。16・17の大畠1・2号墳は木棺直葬である。18～20の小原古墳群は組合せ石棺、木棺直葬、石蓋土壙で構成されている。隠里古墳、崩レ塚1～3号墳は箱式石棺。崩レ塚4号墳は石蓋土壙である。このように、横穴式石室導入に先立つ時期の埋葬方法はすでに指摘されているよう（註23）、竪穴式石室、組合せ石棺、箱式石棺、石蓋土壙、木棺直葬が共存し、多種多用の様相を展開するのが特徴である。さらに、長歟山北5号墳、同8号墳、長歟山1号墳、茶山1号墳などでは同一墳丘内に石室と木棺の両者が共存する例も認められ、埋葬方法の違いによる被葬者の性格等を知る上で非常に興味深いものである。ここでは紙数の関係でふれることはできないが、副葬品のセット関係、埋葬頭位の問題、棺の位置関係等今後の研究課題

であろう。

次に、埋葬主体部の主軸の方向、つまり頭位の問題についてふれておこう。小原1～3号墳がそうであったように、基本的には東西方向に主軸をむけるのが原則のようである。長戸山1・2号墳の資料は手元になく不明であるが、墳丘をもつ古墳は多少のずれはあるもののほぼこの範囲に入る。ただ1つ例外として、茶山1号墳の第2主体と第3主体がある。これはいずれも南北方向に主軸をもつ。東西方向に主軸にもつものは枕に転用された須恵器杯の位置関係、首飾りの玉類、金環、銀環、刀剣等の位置関係から考えて、すべて頭位は東である。

墳近外埋葬は小原1号墳に1基、2号墳に2基認められた。他に類例を求めるに、長戸山北4号墳に1基、大畠1号墳に3基という状況で、決して普遍的なものではないことがうかがえる。

最後に、遺物について若干ふれておく。小原1号墳第2主体部から出土した鉄製鋤先の出土例は日上戸山180号墳に1例だけあり、通常言われている5世紀後半に農具が鉄器化するという理解を裏付けるものであろう。同じく、1号墳第2主体部、2号墳第3主体部から出土している製塩土器は脚の付かない丸底のものである。外面は横方向の叩き、内面には指頭圧痕が観察される。口径8～9cm、器高は5～6cmを測り小型ものである。これらの特徴は製塩土器の変遷の中で、最も小型化する時期のものである。中国山地の山間部では西江遺跡（註24）、谷尻遺跡（註25）、大倉遺跡（註26）等が製塩土器をもつ遺跡として知られているが、いずれも古墳供獻例ではない。古墳供獻例としては琴海1号墳（註27）等海岸部の古墳があげられているが、いずれにしても、立地の関係から製塩と古墳の被葬者が有機的に結びつく。山間部の小原1・2号墳の2個体の製塩土器は他に類例がないだけに結論を急ぐわけにはいかない。

以上、紙数の関係で多くを触れることができるなかったがまとめとする。先学諸氏の御叱正をお願いする次第である。

（2）窯址及び鉄滓出土土壤墓について

A・B両地区を合わせて3基の窯址が検出され、現在のところ津山市で20例、岡山県内では約66例が発見されている。そしてこれらのほとんどが横口を持つタイプである。最近では総社市、岡山市（註28）など県南でも発見されており、この種の窯址の分布がほぼ県内全域に見られるようになり、その分布が美作地域を含む県北部の特殊性から普遍的な様相へと変化してきている。また、今回の調査ではB地区窯址1の内部から炭が検出されいっそう「炭窯」の可能性が高くなった。この窯の構造など細分分析は津山市緑山遺跡（註29）の考察が詳しく、現在までの見解はほぼこれを踏襲しており、本遺跡での特徴もほぼそれを追隨したものである。ここで簡単に緑山遺跡の見解に少し触れてみたい。窯が切り合って連々と構築され新旧の前後関係が明瞭な事例から、一般的に焼成部の床面傾斜角度が大きくなる程時期が新しくなり、これは窯内部の熱効率を上げるための改良と解され、さらに改良されれば付設施設で例えれば煙道

の排水溝など操業工程上重要性が低い部分が簡略化されてくる。そして窯は短期操業（1回限り）よりも補修を行いかなり長期にわたって操業を行っていたと考えている。この簡略化の現象は同じ工業団地内の崩レ塚遺跡でも考えられており、煙道の退化形態を最新のタイプとして捉らえ窯の操業順序を想定している（註30）。本遺跡の窯でこの床面傾斜角度をみてみるとA地区の窯が約2.5度、B地区窯1が2.5度、窯2が4度であり、これを前者の分析に仮にあてはめるとA・B地区窯1からB地区窯2への変遷が構造論から窺えるが、各々が散在的に分布しそして周辺に製鉄炉がみられないことから、緑山遺跡の場合のように一箇所で連続的に各工程の操業を行っていたとは考えにくく、これらが単発的分業生産の一部で製鉄炉が他の所にあったのか、生産体制を考えるにあたっては、周辺地域も含めて再考することが今後の課題である。

次に出土遺物から時期を考えてみたい。例えば特異な例で横穴式石室墳に切られている場合（註31）など新旧関係がはっきりとし、時期をある程度特定できる場合を除けば、一般的にこれら窯内から遺物が出土する事はほとんど無く時期決定は非常に困難である。しかし付設する施設から出土する場合があり、これは窯本来の時期を決める根拠にはやや欠けるものの、周辺に出土遺物と同時期の別遺構が見られない場合には、ある程度の時期を推測する事も可能である。B地区窯1では付設する上方溝から須恵器杯蓋・身の小片が1個体ずつ出土しており、周辺に同時期の別遺構が見られない事を消極的根拠として時期を推察してみると、いずれも口径が小さく特に511の杯身の立ち上がりが短い特徴からいわゆる田辺罐年（註18）のTK209の範疇で捉えられ、7世紀前半頃と考えられる。また、B地区窯2の焼き口埋土出土の須恵器は、天井部につまみが付く杯蓋であり、これは少なくとも窯1出土の須恵器よりは後出であり、どちらかと言えばA地区出土の杯身の時期に近いものと思われる。これら土器の特徴だけから言えばB地区に関しては、窯1から2への変遷が窺え前述の床面傾斜角度の分析結果と符号する。さらに前述のようにこれらが示す時期は窯本来の操業時間を表すものではない可能性が大きいが、周辺に同時期の別遺構が存在しない事、さらに窯が長期操業を基本とするならこれら土器の時間幅は、ある程度窯の連續した操業時間幅を示すものかもしれない。

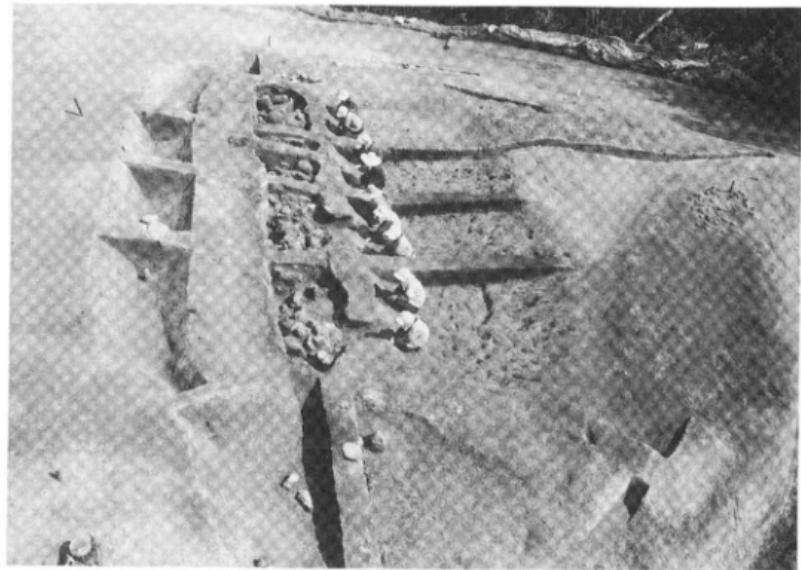
最後に、鉄滓が出土したB地区土壙墓3について若干の見解を述べておきたい。この土壙墓は共伴した須恵器から7世紀前半頃の時代が考えられる。この時期で鉄滓が供獻されている墳墓は横穴式石室墳の事がほとんどで、このような土壙墓の例は周辺地域では見られない。しかも本土壙墓では須恵器甕1（註32）に対しかなり大きめの鉄滓が2の割合で供獻され、鉄滓の比重がかなり高い事が窺える。さらに鉄滓はかなりの大きさである事から、製鉄炉の炉壁ないしは炉底滓片の可能性が考えられ、その場合より生産に密着したものの供獻と言える。前述の窯址が製鉄用の炭窯であったと仮定すると、両者がほぼ同時期の所産でおかつ製鉄に関連している事象から、本土壙墓の被葬者が製鉄に関連していた人物とも推測でき、さらに横穴式石室に葬られていない事は、製鉄集団を総括していた首長というより、製鉄そのものを行って

いた工人あるいはその長であった可能性が、供獻品の比率や鉄滓がより生産に密着した炉壁片などの可能性から、さらには墓の形態などからも言えるのではないかろうか。また今後資料が増加すれば当時の專業集団の生産体制としては社会構造の一端が明らかになってくるであろう。

- (註1) 高畠知功「百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』 岡山県教育委員会 1982年
- (註2) 河本 清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』 津山市教育委員会 1981年
- (註3) 安川豊史「東藏坊遺跡B地区発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集』 津山市教育委員会 1981年
- (註4) 保田義治「中原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第37集』 津山市教育委員会 1990年
- (註5) 津山市教育委員会が発掘調査を実施した。報告書は未刊
- (註6) 津山市教育委員会が発掘調査を実施した。報告書は未刊
- (註7) 註2と同じ
- (註8) 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』 津山市教育委員会 1982年
- (註9) 都出比呂志『日本農耕社会の成立課程』 岩波書店 1989年
- (註10) 藤田恵司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として」『考古学研究』31巻2号 1984年
この見解に対して、都出比呂志氏は(註9)の中で堅穴住居の火災が極めて多い事実を重視し、藤田氏の見積りよりも住居の密度は高いとの立場をとられた。
- (註11) 一貫西遺跡で検出された弥生時代中期の集落は1時期に限定されるが、ここでも類例が報告されている。
- (註12) この年数は、B地区の集落で設定した細分の1時期にもほぼ相当するものと思われる。
- (註13) 行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』 津山市教育委員会 1985年
- (註14) 行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』 津山市教育委員会 1990年
- (註15) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書は未刊
- (註16) 河本 清、橋本慈司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 岡山県教育委員会 1957年
- (註17) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。
- (註18) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- (註19) 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
- (註20) 行田裕美、小郷利幸「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』 津山市教育委員会 1990年
- (註21) 行田裕美、保田義治「御谷古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集』 津山市教育委員会 1988年
- (註22) 墓上をほとんどない箱式石棺古墳は遺物を作出する例が少なく、年代決定が難しいことが多いのであるが、現在岡山県山代吉備文化財センターが中國横断道建設に伴って発掘調査を実施している真庭郡久世町の中原古墳群で良好な資料が得られている。福田正継氏の御教示によると5世紀後半という年代が得られるという。
- (註23) 今井 奔「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史等1巻原始・古代』 1972年

- (註24) 田仲満雄・正岡聰夫・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会 1977年
- (註25) 高畠知功・山崩康平・竹田 勝・栗野克巳・井上 弘「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会 1976年
- (註26) 松本和男・友成誠司「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会 1977年
- (註27) 山磨康平・福田正継「琴海1号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36』岡山県教育委員会 1980年
- (註28) 岡山市の津高団地造成に伴う発掘調査で5基の窯址と2基の製鉄炉が発見されている。岡山市教育委員会の草原孝典氏のご教示による。
- (註29) 中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津山市教育委員会 1986年
- (註30) 行田裕美・保田義治「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会 1989年
- (註31) 津山市船込遺跡、総社市長砂谷2号窯、青谷川1号窯などで7世紀前半の古墳に切られており、これら窯が7世紀前半を下らない時期に構築されている事がわかる。船込遺跡に関しては未報告。村上幸雄「長砂谷1号墳・長砂谷製鉄関連遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告6』総社市教育委員会1988年 村上幸雄・前角和夫「青谷川古墳群・青谷川製鉄関連遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告8』総社市教育委員会 1990年
- (註32) この須恵器内には車輪文叩き目が見られ、これらと同様な叩きを施す須恵器が県内の須恵器窯（牛窓町寒風古窯址他）や古墳（山陽町岩田14号墳他）などでも発見されており、車輪文が須恵器の生産と流通の研究の一助になると考えられ、これについては車輪文の意味合いも含めて今後の課題である。なお車輪文の研究には次の論文などがある。横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号 1981年

図 版



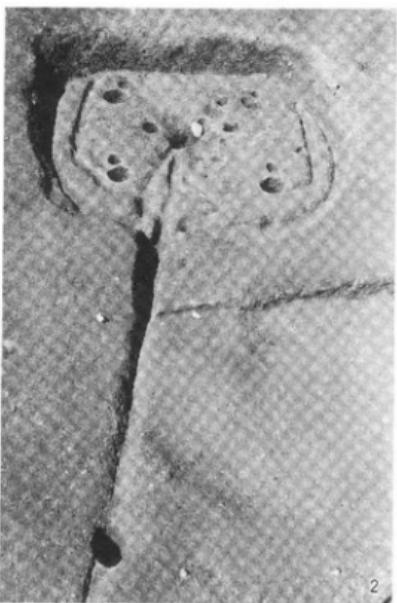
A地区窯址全景（人がいるところが横口である）

A地区

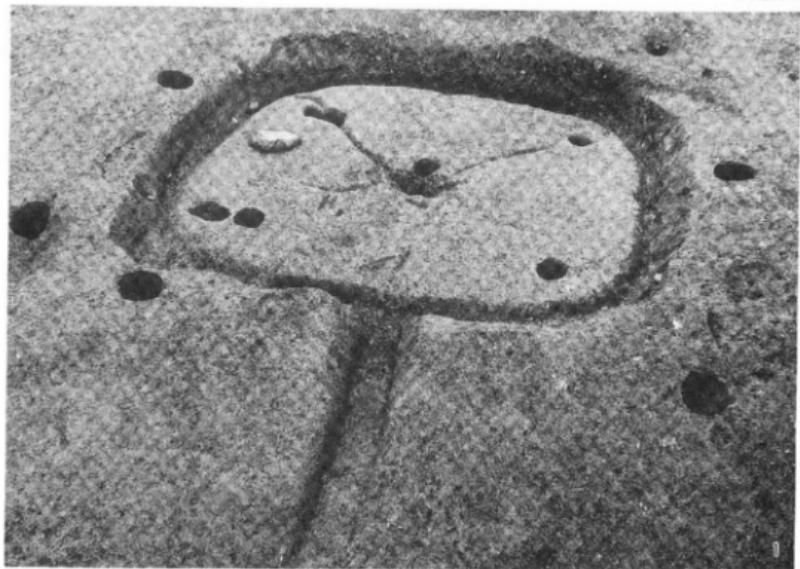
図版 1



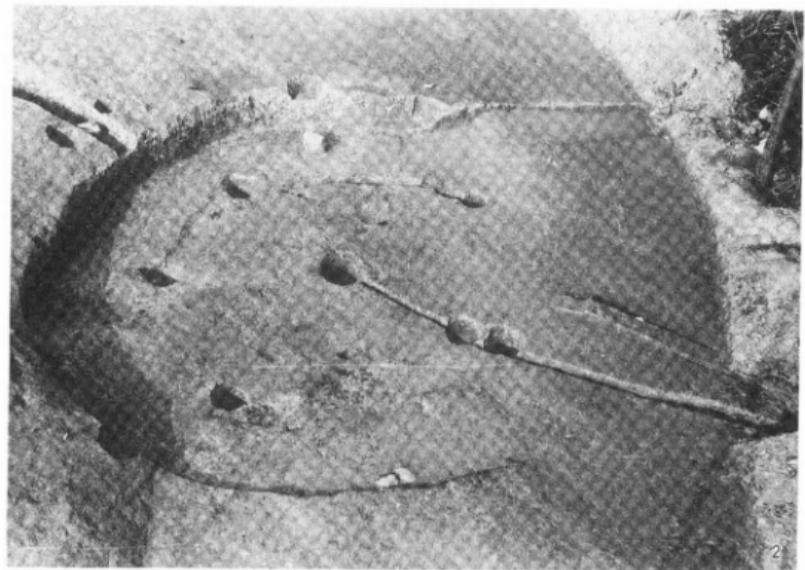
1号墳調査前風景（西から）



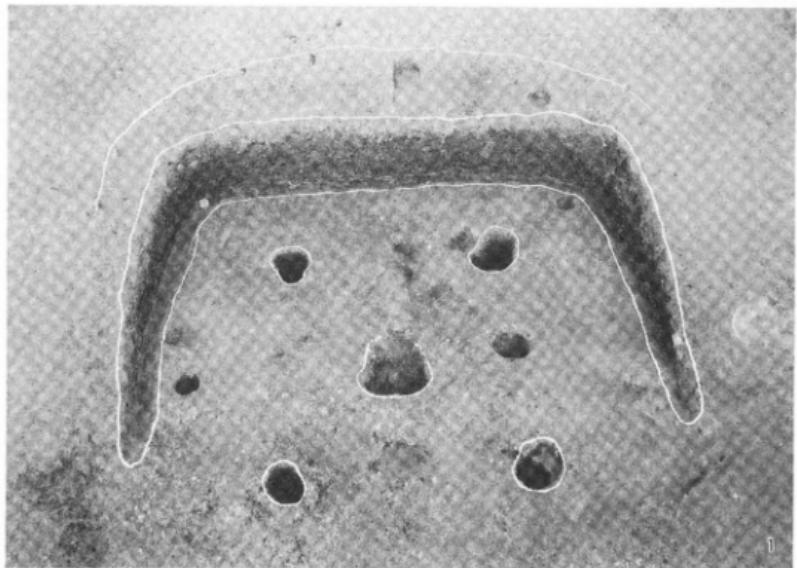
住居址 1（南から）



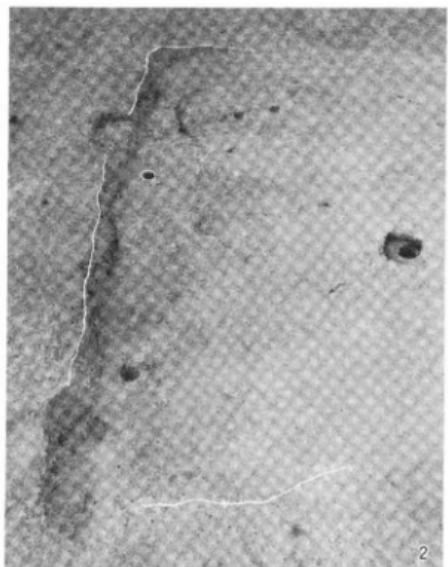
住居址 2 (南東から)



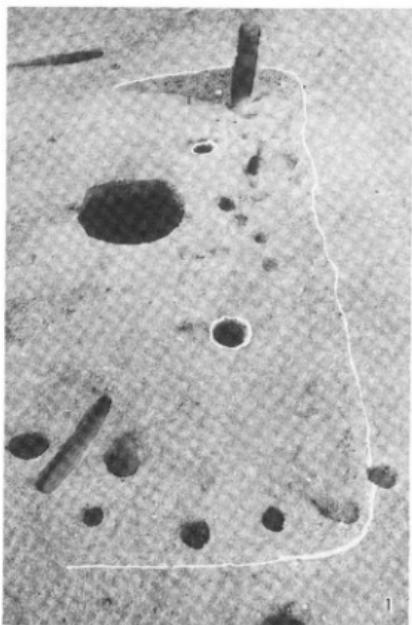
住居址 3 (南西から)



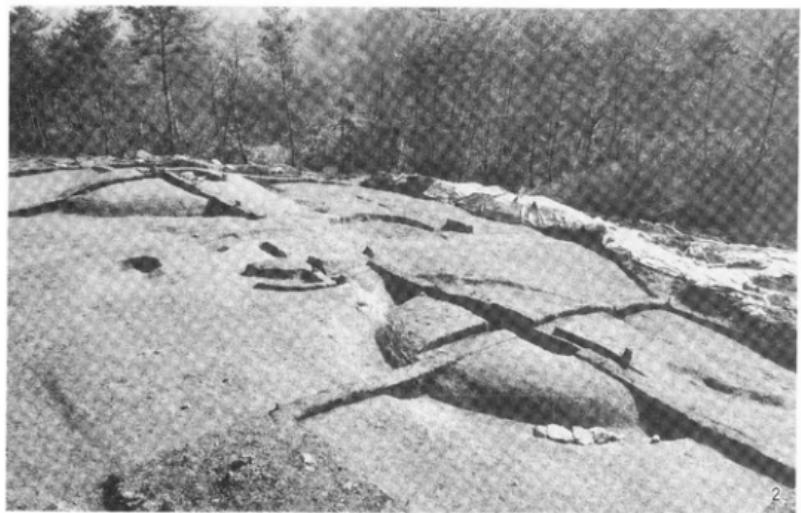
住居址 3 (西から)



段状遺構 1 (南東から)



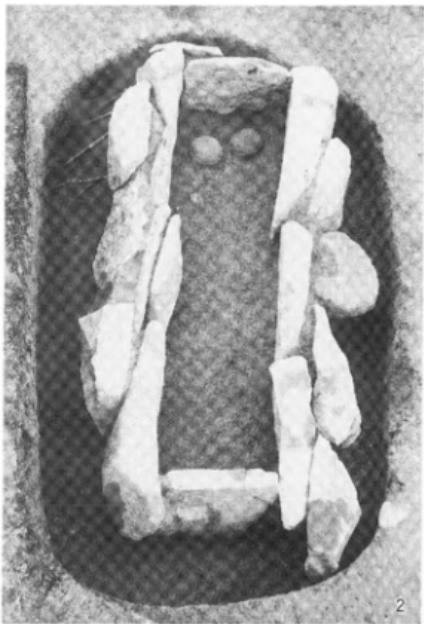
段状遺構 2 (南東から)



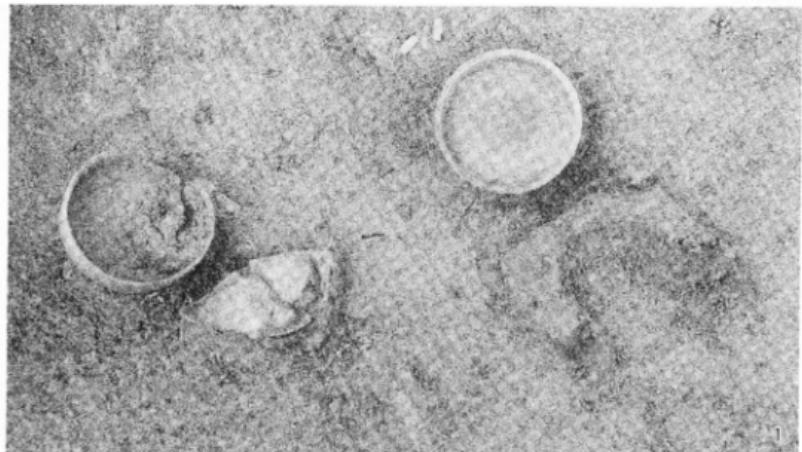
1 ~ 3号墳全景 (北西から)



1号墳 第1主体部（南から）



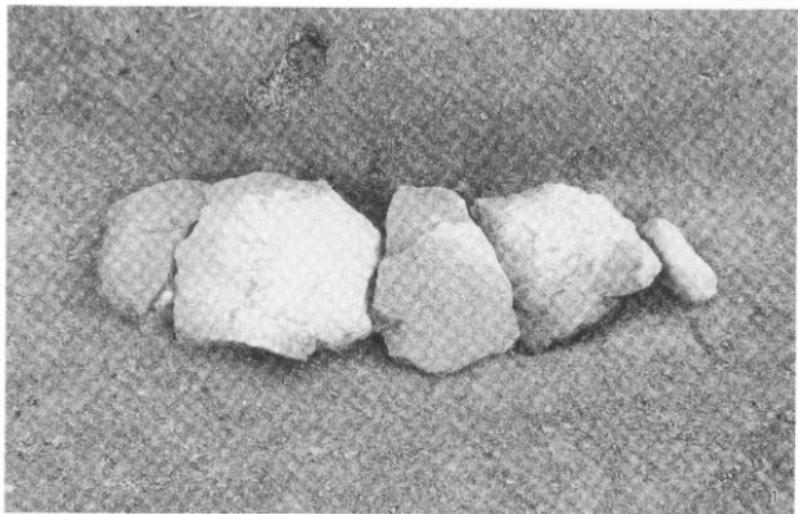
1号墳 第1主体部（西から）



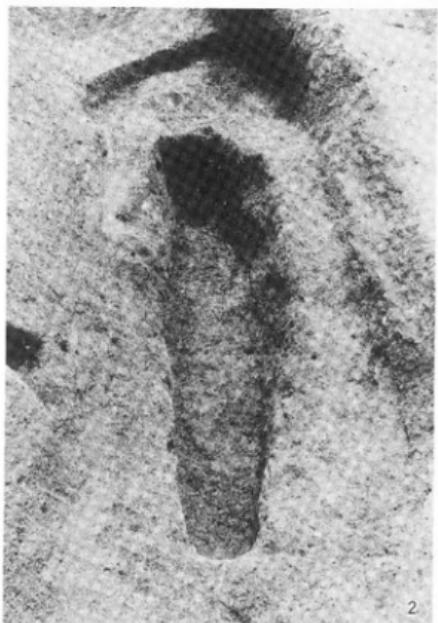
1号墳 第2主体部 遺物出土状態（南から）



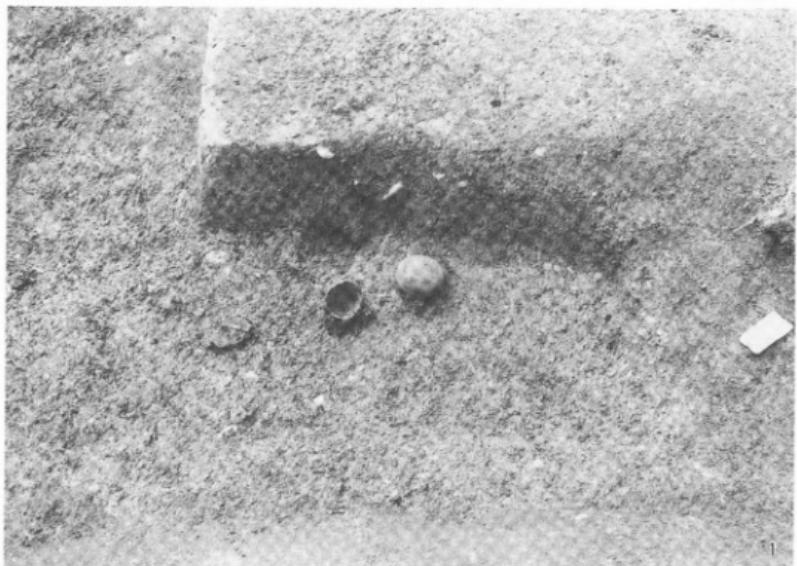
2号墳 第1主体部（西から）



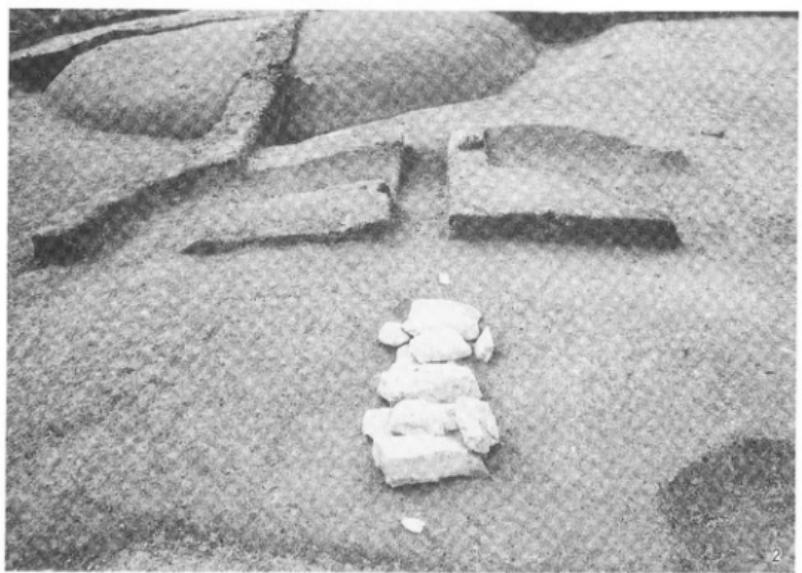
2号墳 第2主体部（西から）



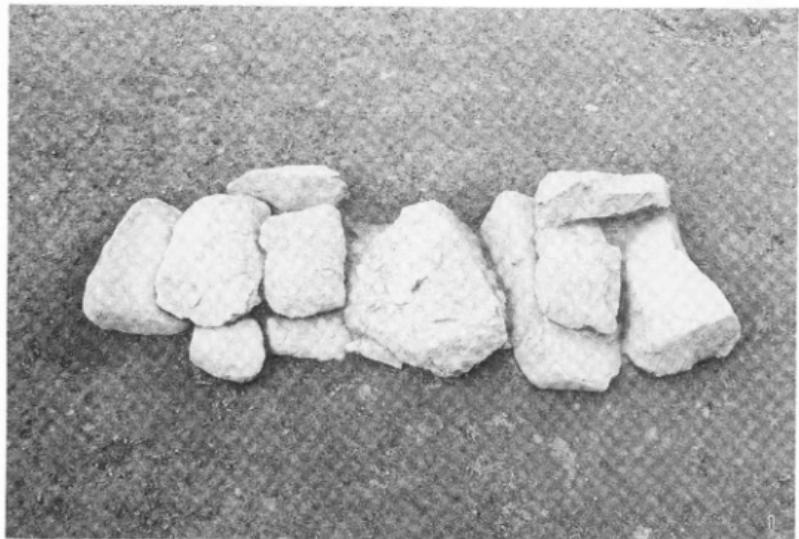
2号墳 第2主体部（北から）



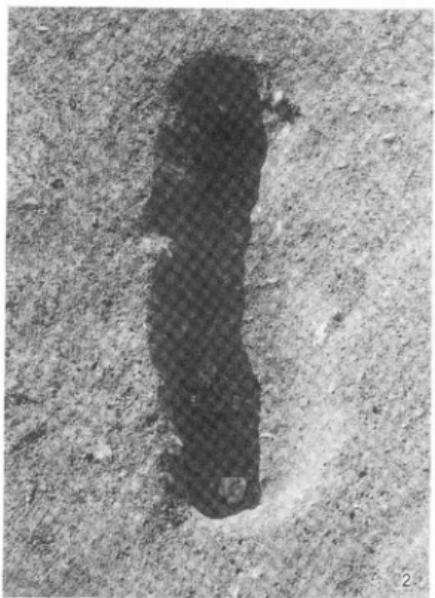
3号墳 第3主体部（東から）



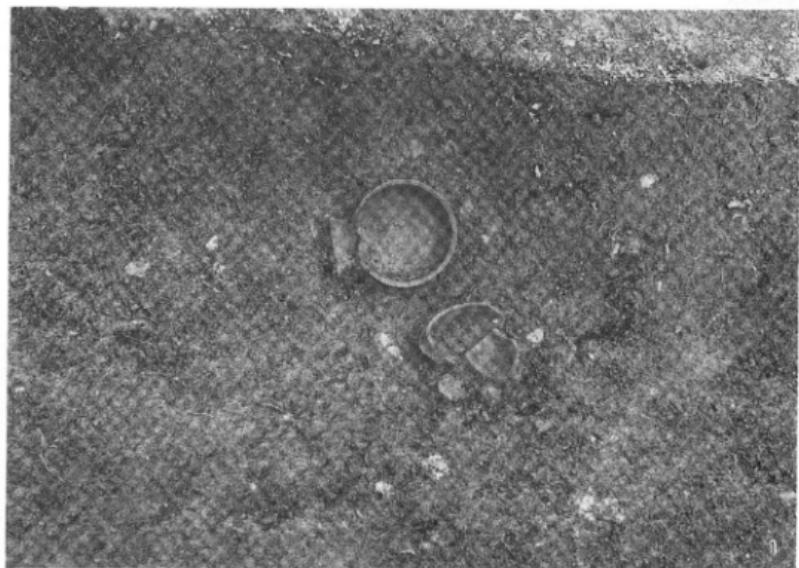
3号墳（東から）



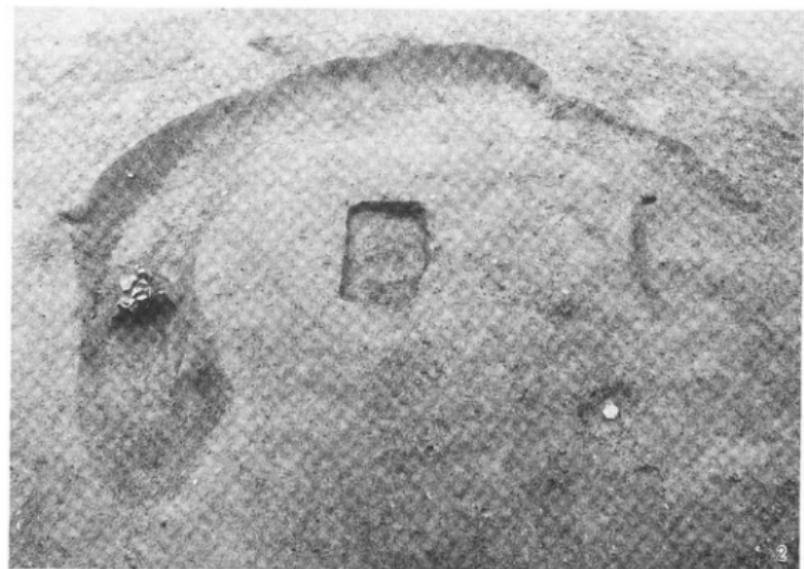
3号墳 主体部（南から）



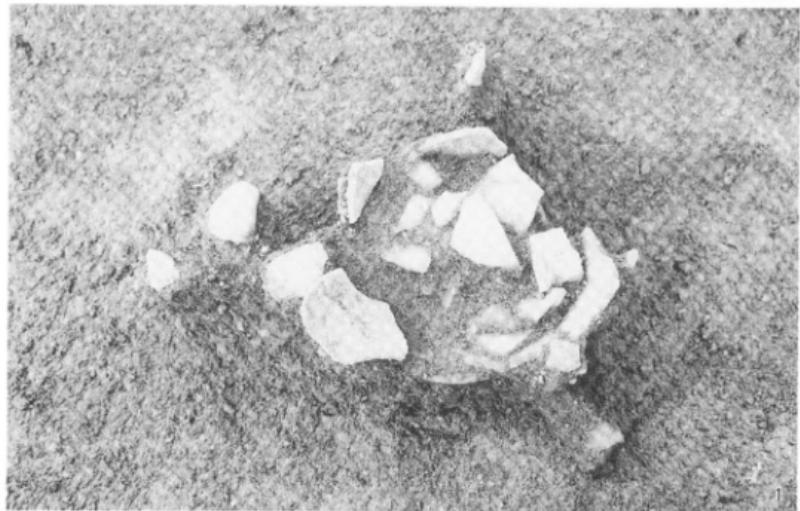
3号墳 主体部（東から）



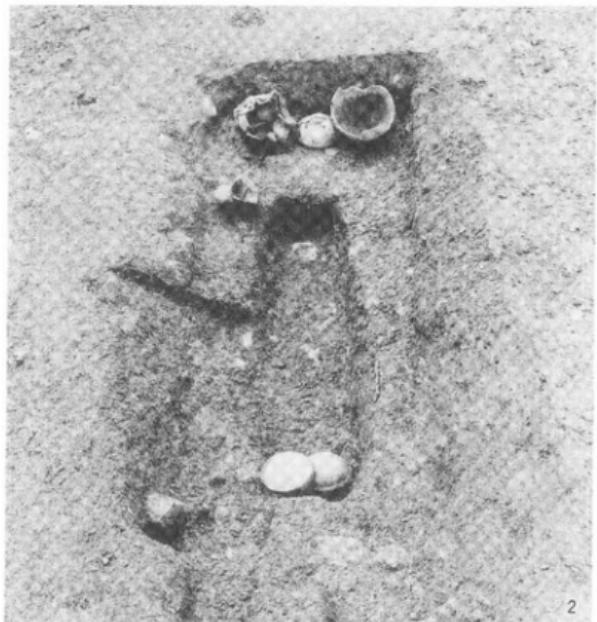
3号墳 周溝遺物出土状態（北西から）



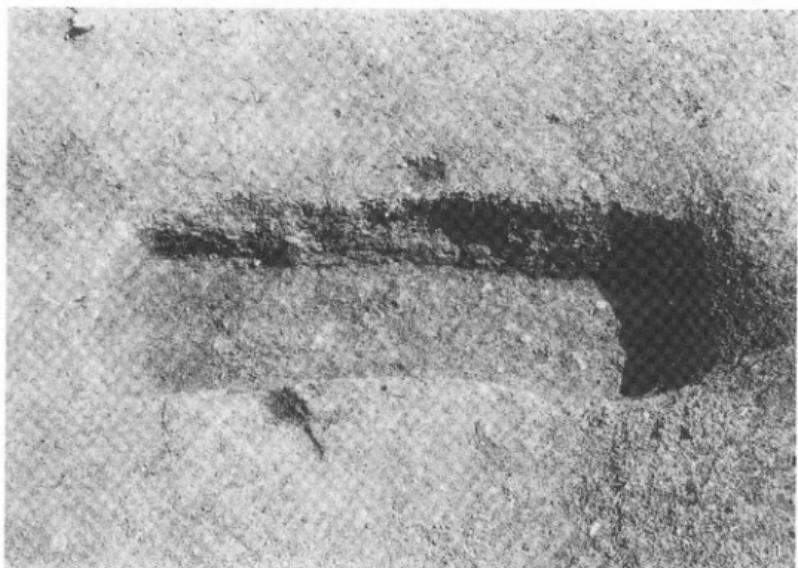
4号墳（南東から）



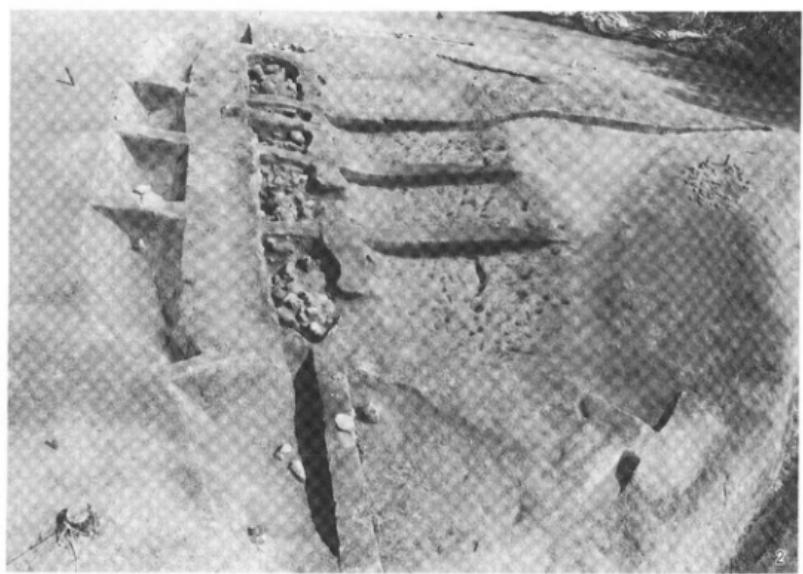
4号墳 周溝遺物出土状態（南西から）



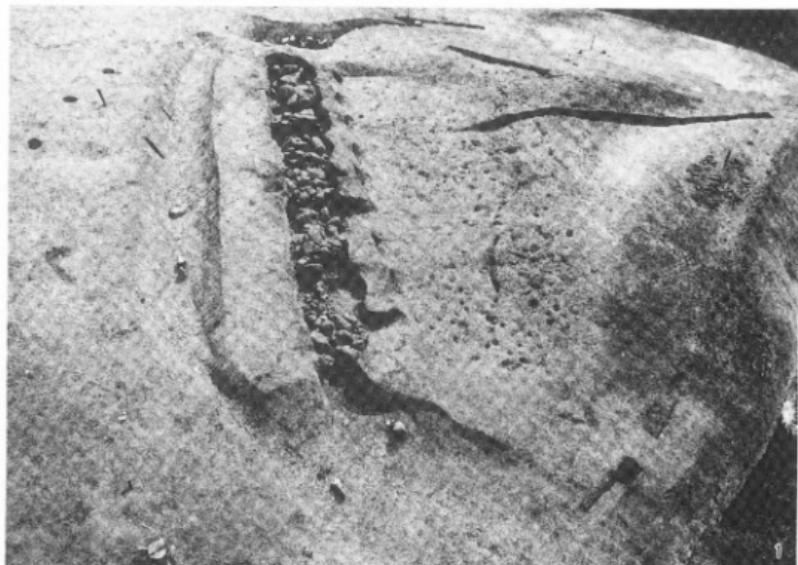
土壙墓2（東から）



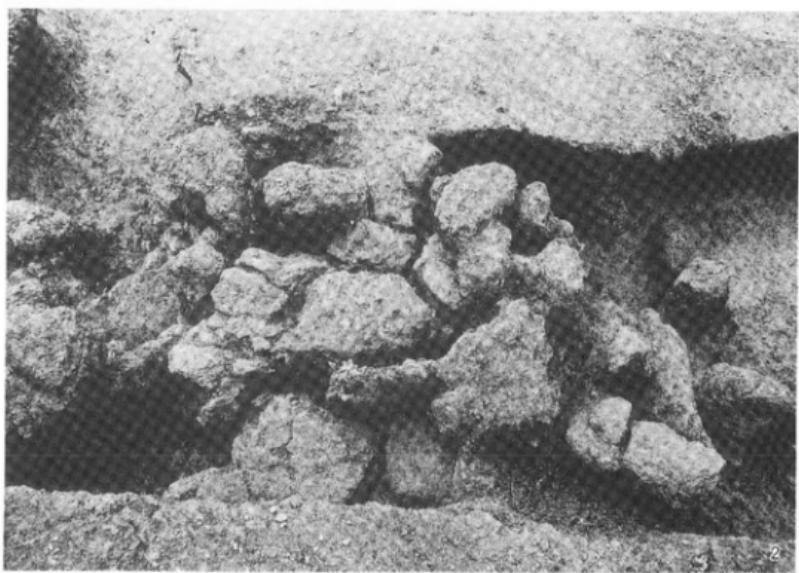
土壌墓1（北から）



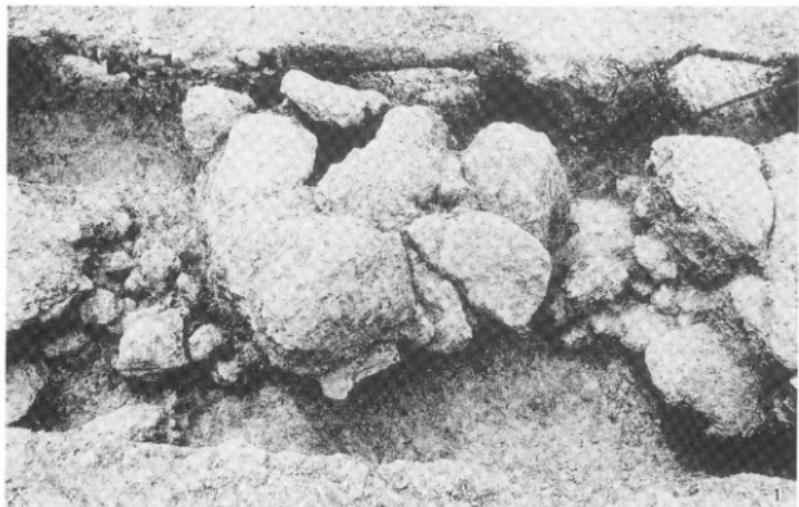
窯址（西から）



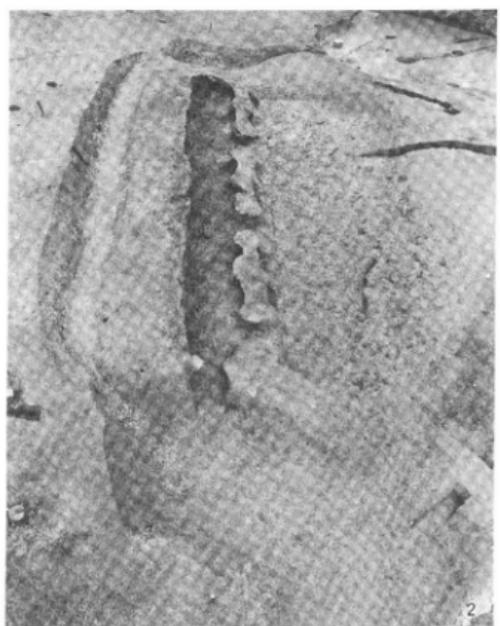
窯址（西から）



窯址 天井壁出土状態（北から）



窯址 天井壁出土状態（北から）



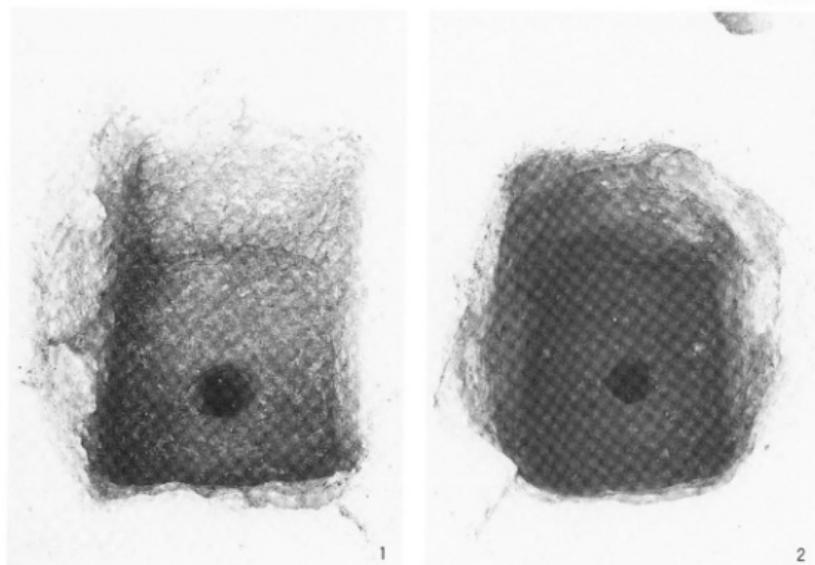
窯址（西から）



窯址 煙道部から焚き口方向を望む



鉄滓出土状態（西から）

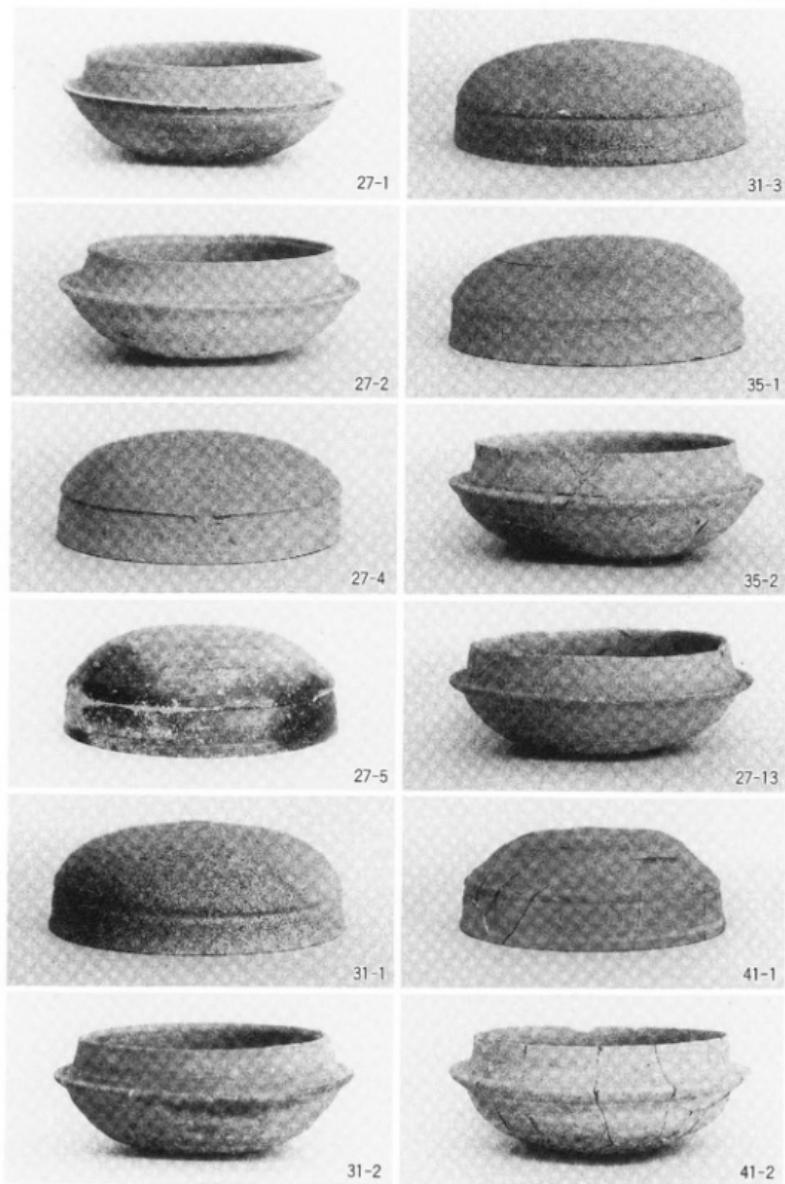


土壤1 (南西から)

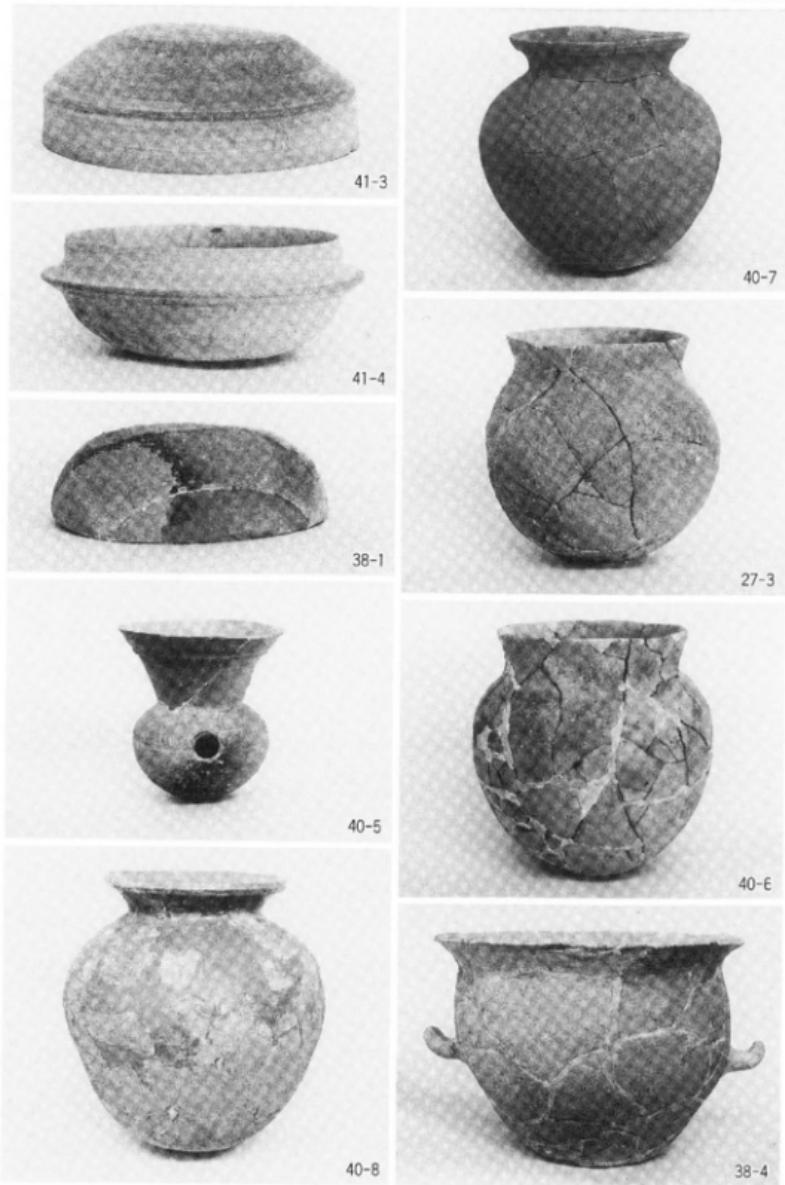
土壤2 (南西から)



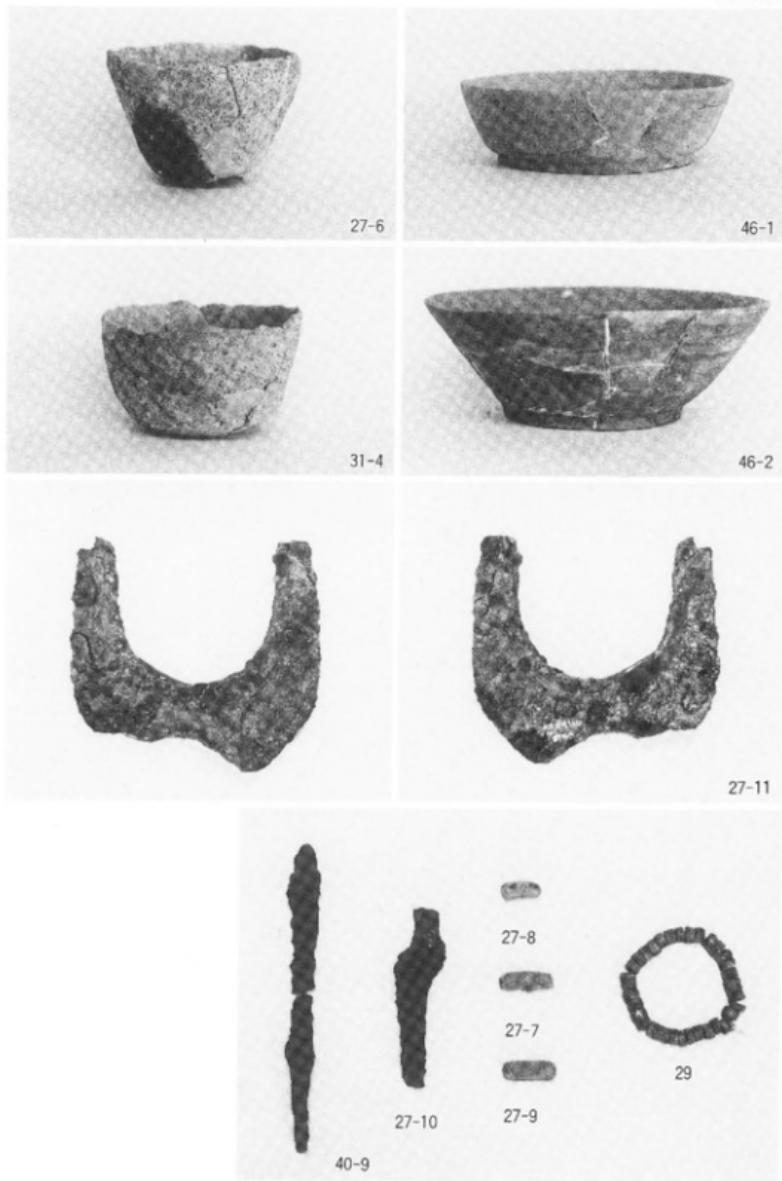
調査風景



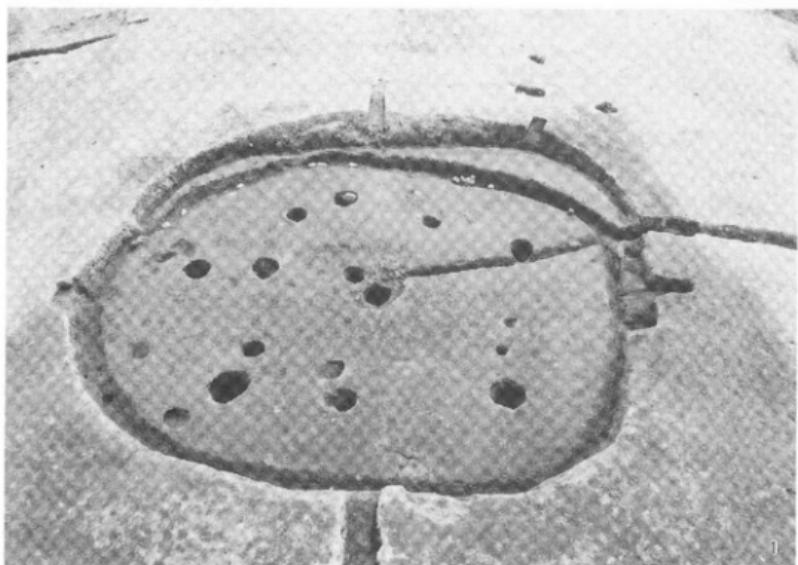
A地区 出土遺物 (1)



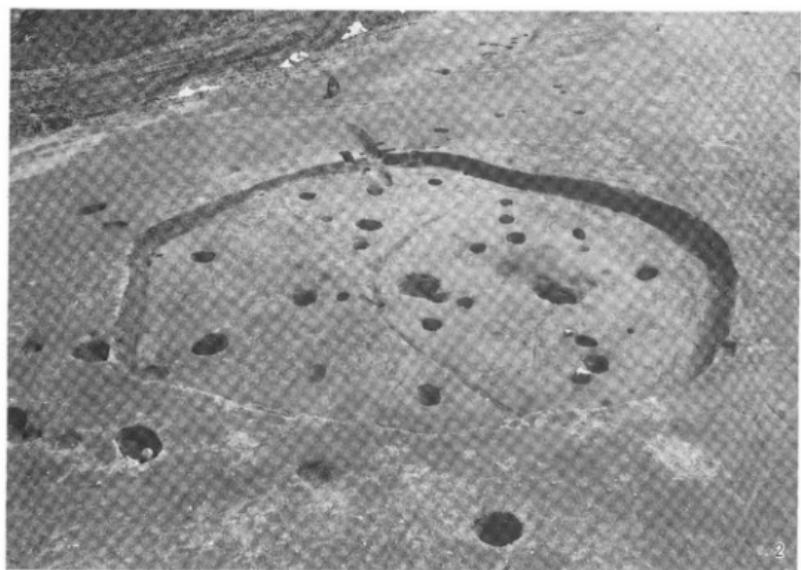
A地区 出土遺物 (2)



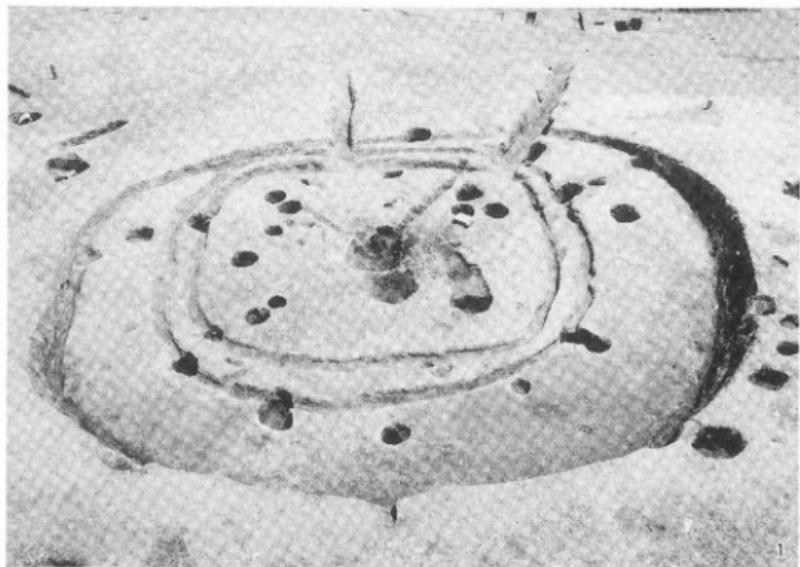
A地区 出土遺物 (3)



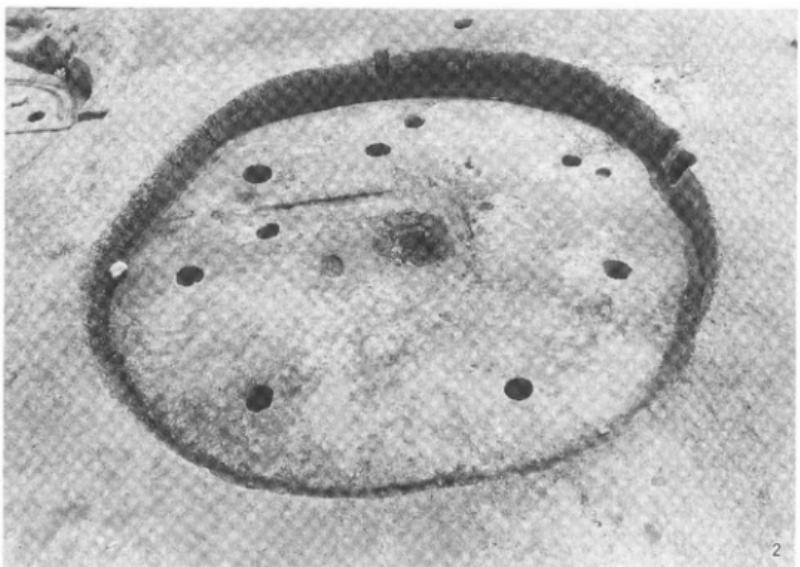
住居址1（西から）



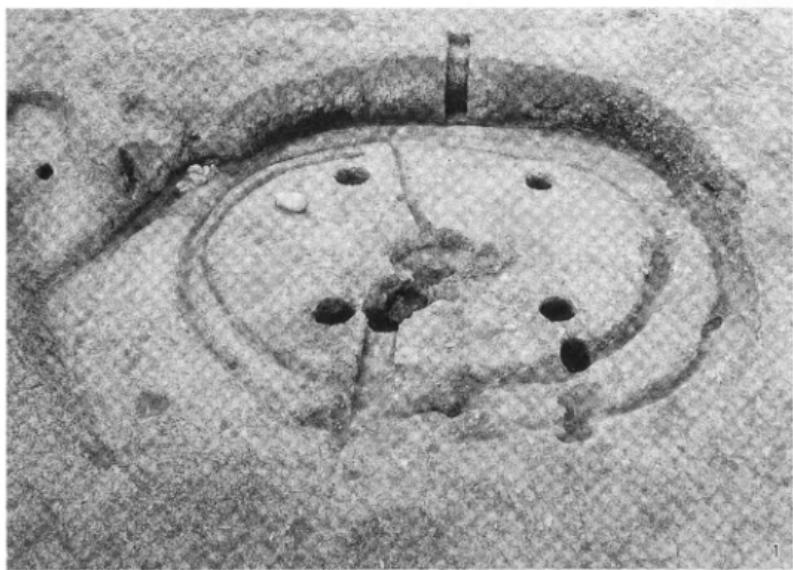
住居址2・3（西から）



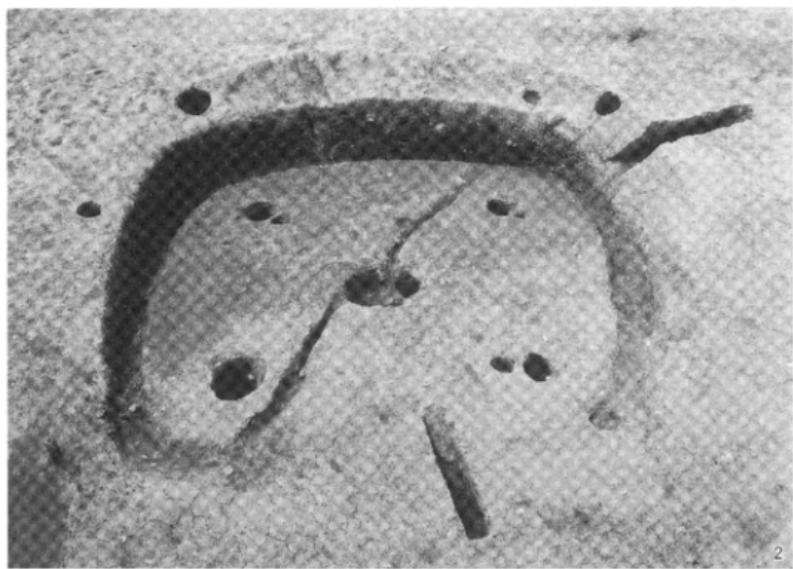
住居址 4 (西から)



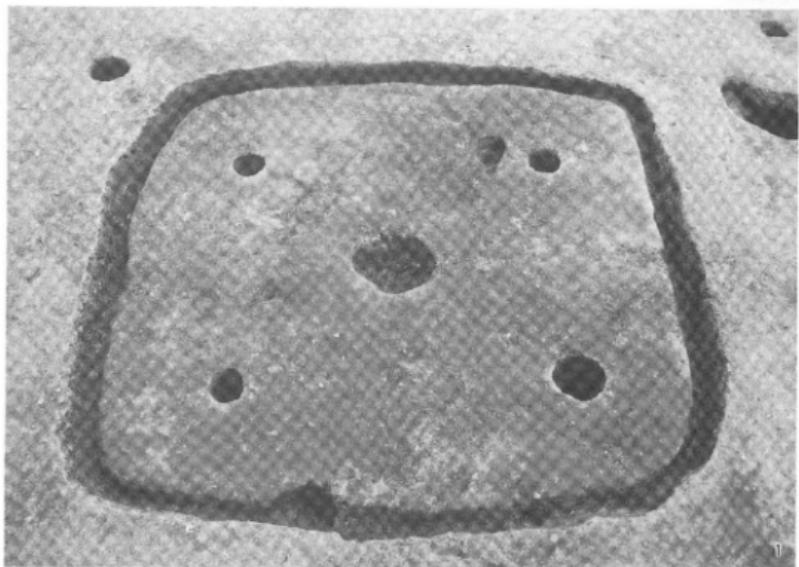
住居址 5 (北東から)



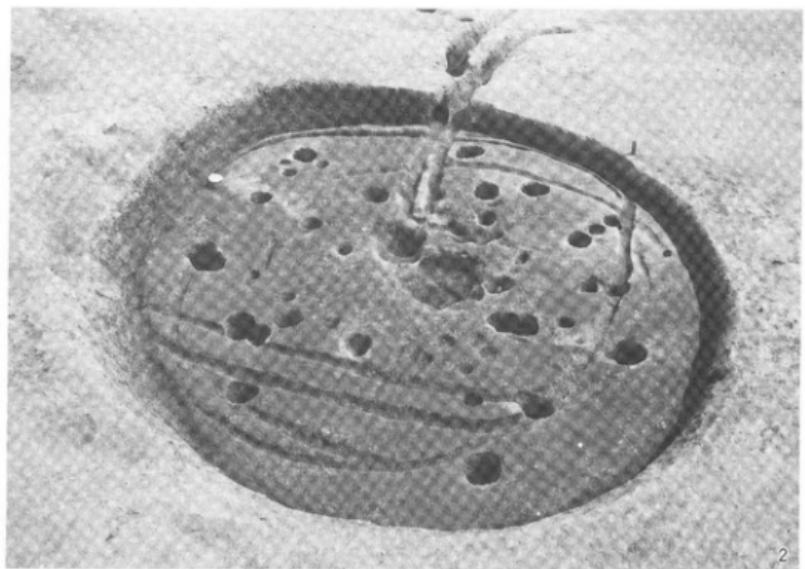
住居址6（東から）



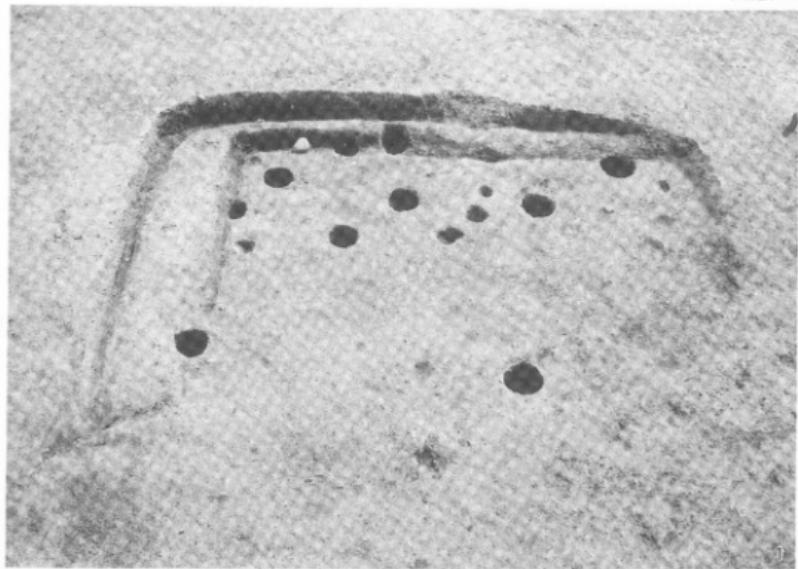
住居址7（東から）



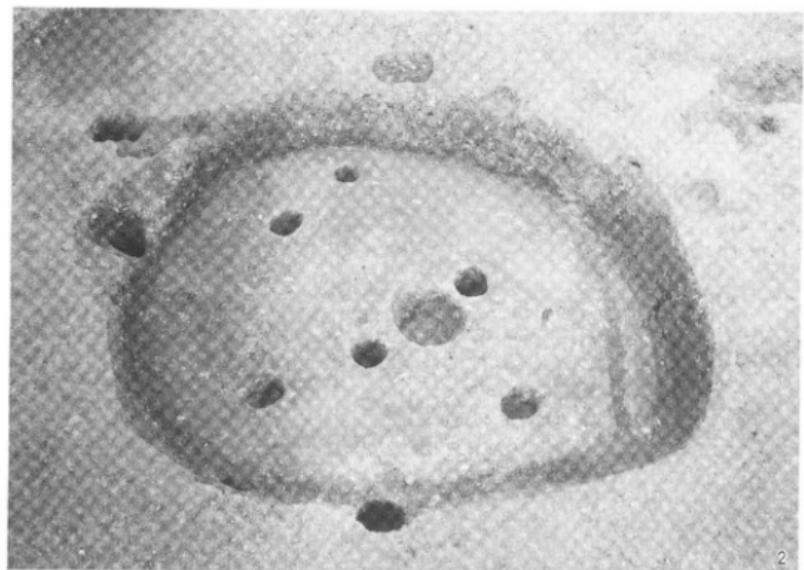
住居址 8 (北から)



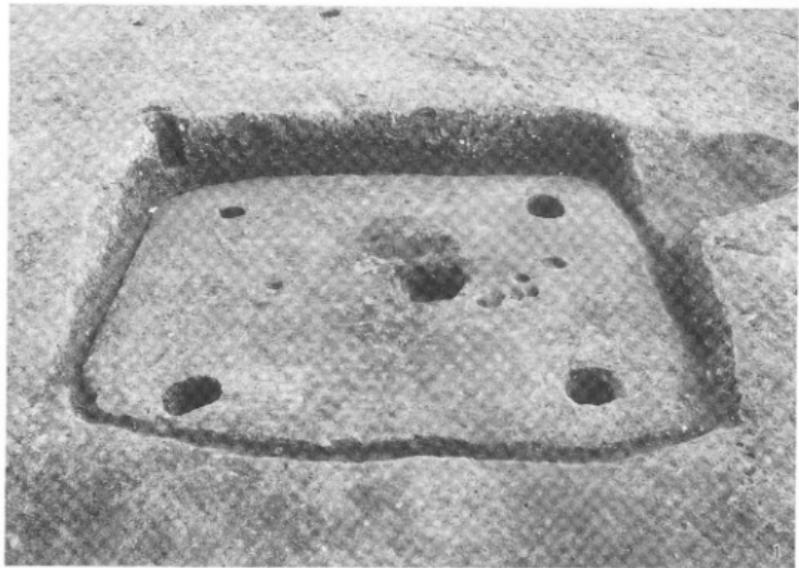
住居址 9 (北から)



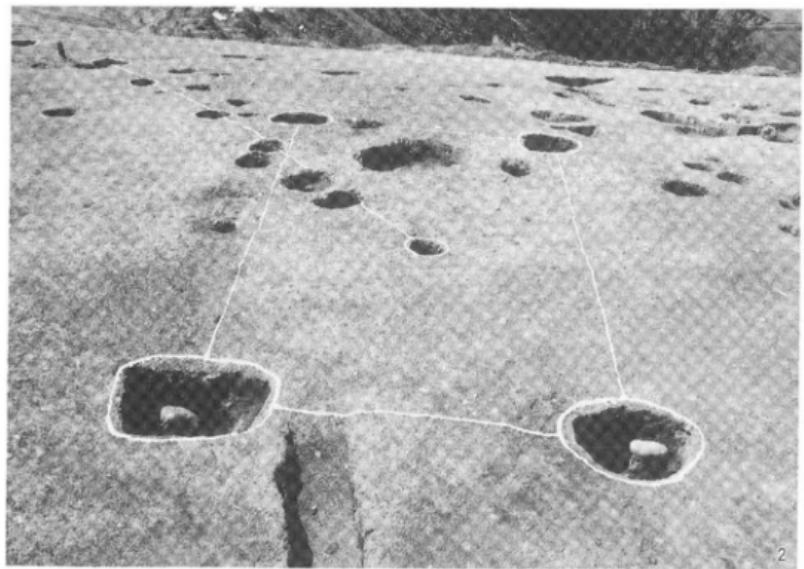
住居址10（北東から）



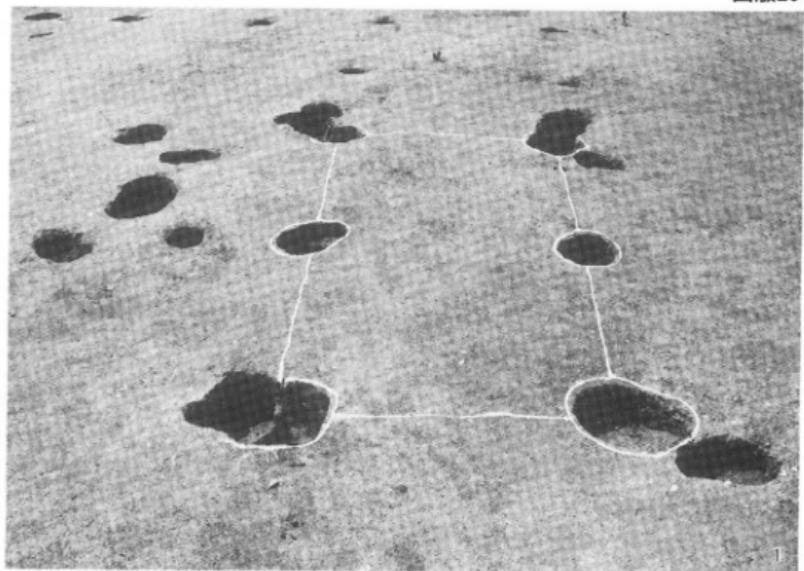
住居址11（西から）



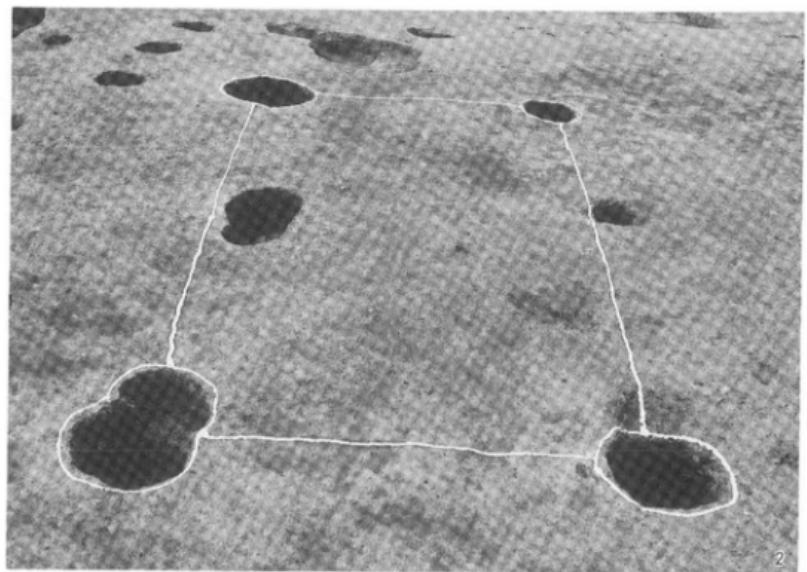
住居址12（北東から）



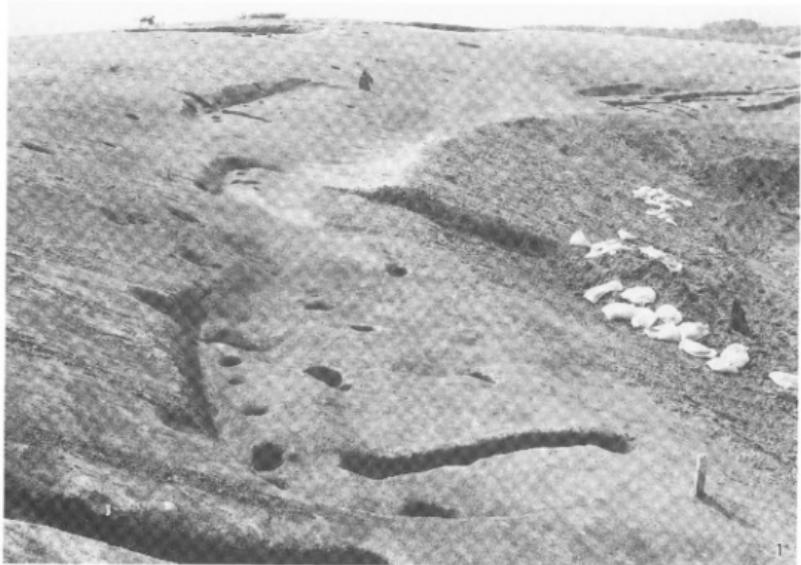
建物址1・柵列状遺構2（南東から）



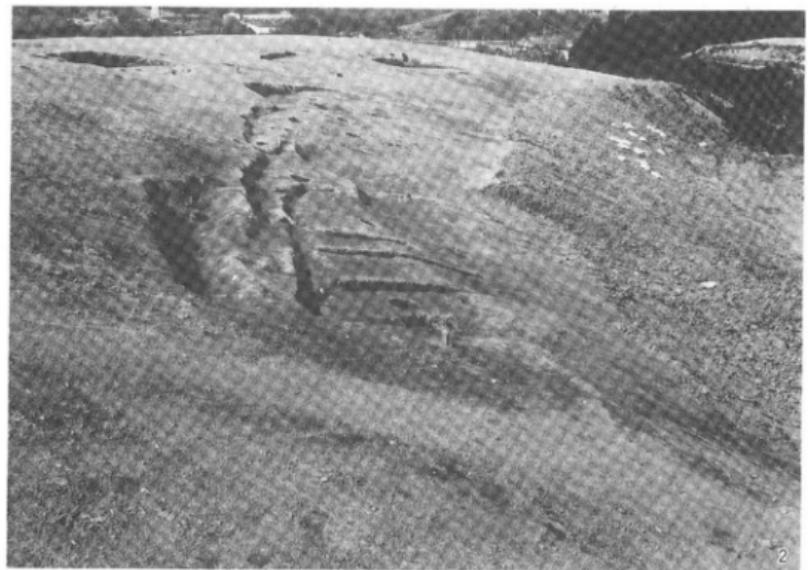
建物址 2 (東から)



建物址 3 (北から)



段状遺構 1～3 (南東から)



段状遺構 4～8 (南から)